**司会の言葉**

**シンポジウム1「細胞間相互作用から見た肝再生機序の現状」**（公募、一部指定）

司会　汐田　剛史（鳥取大学大学院遺伝子医療学）

谷水　直樹（札幌医科大学医学部附属フロンティア医学研究所）

肝臓の再生は、比較的軽度肝障害においては残存肝細胞の増殖に依存し、慢性或いは重度肝障害時には肝幹前駆細胞の増殖・分化に依存すると考えられてきた。一方、最近の遺伝子改変マウスを用いた研究や細胞系譜解析により、慢性肝障害時には肝細胞の脱分化や分化転換が肝再生に寄与すると報告されている。また、免疫細胞や非実質細胞と上皮細胞の細胞間相互作用が肝組織の再構築に重要な役割をはたしていることも明らかになってきている。

本シンポジウムでは、肝再生機序の解明に向け、治療的アプローチを含め、基本的コンセプトが、肝幹前駆細胞、肝細胞、胆管上皮細胞、非実質細胞の細胞間相互作用に関連する研究についての御発表をいただき、肝臓の再生過程に「肝臓の細胞社会」がどのように対応し、肝組織・機能が再構築されるかについて議論したい。

**シンポジウム2「肝の恒常性維持と病態形成における細胞間クロストーク」**（公募、一部指定）

司会　 竹井　謙之（三重大学大学院消化器内科学）

河田　則文（大阪市立大学大学院肝胆膵病態内科学）

肝臓では肝細胞と類洞壁細胞などの構成細胞群が機能を分担しつつ情報のクロストークを営み、複雑かつ多岐な肝機能の発現と恒常性維持を可能としている。

その変調は様々な肝障害を惹起させる。本シンポジウムは各細胞の機能分担、類洞やデイッセ腔などの機能発現の「場」としての意義、様々なメディエータが織り成す「肝細胞社会学」に焦点を当て、その生理学的意義や、病態機序への関与を考えてみたい。

**シンポジウム3「肝細胞微小免疫環境の解明に基づく疾患研究－動的平衡の維持と破綻のメカニズム」**

（公募、一部指定）

司会　考藤　達哉（国立国際医療センター肝炎免疫センター）

全　　 陽（神戸大学大学院病理診断学）

肝細胞の恒常性の維持には、非実質細胞と免疫細胞によって構成される微小環境が重要である。肝臓に出入りする免疫細胞や臓器在住マクロファージは、構成細胞との密なInteractionによって肝臓の細胞社会の動的平衡を維持している。慢性肝胆道疾患、肝硬変症、肝胆道悪性疾患は、細胞死―再生という動的平衡の破綻として理解することが出来る。近年のバイオテクノロジーの進歩は目覚ましく、単一細胞遺伝子解析、網羅的オミクス解析、動物モデルでの遺伝子機能評価が飛躍的に加速しており、微小環境構成細胞に関して新たな知見が得られる素地は出来上がっている。本シンポジウムでは、主に免疫細胞の解析を通して、肝細胞の恒常性の維持や破綻のメカニズムを明らかにする研究成果をご発表いただき、肝胆道疾患病態の理解に新たな視点を与えるものとしたい。